

父の看取りと、 私への最期の宿題 「今から、ここから」2

ソーシャル
ワーカー

馬渡 徳子

前回、初回をお読み戴きました方々から、「本当にお父様のことを尊敬し、大好きだったのですね。でないと、こんなに熱く動けない。ご両親は、お幸せですね。」「きれいごとばかりでなくて、いつものように、もっと毒を吐けば。(笑)」等の反応をいただきました。書いてみて、気付いた事なのですが、正直、日本に殆どいなかった父でしたので、かなり美化していたかもしれませんが、だからこそ、どうか関わる人々に、「父のプライドを傷つけないで」という思いに駆られていたのだと思います。また、仕事柄なのでしょう。「患者本人が、支援者に、暮らしぶりの一部だけを観て一面的な見方をされたり、異なる病名と診断されて、将来に不利益を被ることが本当に許せない、と感じて積極的に動くタイプなのだ」と、自分をふりかえることもできまし

た。

さて、時は、2011年3月。父にとっては初孫にあたる、私の娘の結婚式が、あと三ヶ月と迫っていました。父は、東日本大震災の直後から、「お役に立ちたい」という気持ちが逸るからか、自宅に飾ってある賞状を見ながら、「このように、政府から特命を受けて安全監視行動の任務に就いている。」と、ヘルメットを被って、高額な望遠鏡も購入し、毎日片道7キロはある米軍基地に、自転車で通うようになりました。その後も、「オスプレイ」「テポドン」などの旬のニュースに瞬時に反応して、約三年間真面目に(笑)通い続けました。

「これは、専門医の受診が必要な時期」と感じ、地域包括支援センターの保健師さんも同じ見立てをされていました。しかし、

地元で専門医がおられませんでした。隣の市に、有名な医師がおられるとの情報を戴き、これまた「認知症の人と家族の会」の石川支部代表者の後押しを戴き、出逢うことができました。先生は、地域に根ざした精力的な活動を長年されていました。

父には、自覚症状がありませんので、「どのような方法で診察につなげるか」、これが先ずはかなりハードルの高い課題でした。先生には、父の生活史の特徴や、家族の状況をお伝えするお手紙をお渡ししていました。そこで、以下のような「場面設定」を実行しました。そもそも診察には、「配偶者と子ども全員が立ち会うように」助言戴いておりましたので、①発達障害のある孫の子育てに疲れて、うつ状態になっている妻の診察と検査。→②その結果を、配偶者である父と子どもたちに、支援を訴える目的で結果報告の面接。→③配偶者の状況把握が必要なので、配偶者である父にも、検査をきっちりを受けていただく。→④二人の状況についての医師よりの結果報告と、今後についての相談。

母には、「診察予約日の一週間前ぐらいから、ちょっと大げさに情緒不安定になってね。女優になったつもりでね。」と伝え、大阪にいる弟と前日に帰省し、「お父さん、お母さんがうつで大変なんだって。心配で帰ってきたよ。悪くなる前に、一緒に病院に連れて行こう。」と誘いました。「なんで、わしが・・・」とぶつぶつ申ししておりましたが、当日の朝になると、すんなりと「わしが行かんと話にならんやろう!」と、すすんで車に乗り、一同ホッとしました。

母も、「意図して演技すると、うつの役

なのに、予想外にストレス解消になるわ。お父さんが、心配そうに自分を見つめて『大丈夫か?』と声をかけてくれ、そんなことは、もうずっとなかったの、嬉しくもあった。けれど、『自分はいつもこんな顔をして、心配そうに眉間に皺を寄せてお父さんを見ていたのかなど。人に心配そうにされることって、そんなに気持ちの良いものではないな』とも感じた。」とも申ししておりました。

この、『母の後半の言葉』は、後に、「実は、娘である私自身へのメッセージでもある」ことにも気付きました。「私自身が、きっと無意識に、両親や現家族、そして仕事仲間や患者さん・利用者さんに向けている態度でもあるな」と反省し、母の率直な感想に、心より感謝しております。「相互援助関係の構築」というソーシャルワークの価値を、正に身をもって体験した瞬間でした。

かくして、診察が始まりました。通された部屋は、「会議室のような大きな診察室」で、大きな楕円形のテーブルや電子ピアノ、楽器、壁や窓に向かった机、移動できるパソコン、心理テストの道具などもありました。「どこでも、お好きなおところにおかけください」と案内され、私の指示で(ここ、大笑。恐るべし、システム論)、めいめいが腰掛けました。

「描画法」という家族療法の面接技法を、面接者として実施する側ではなく、初めて被験者として体験しました。一番最初に「自分の首が、沢山の人や記号?に鎖で繋がれている絵」を描いた父に、本当に愕然としました。「私を先頭とする家族や周囲

の人々が、きっと父を置いてきぼりにして、急に前のめりに果敢に関わるようになり、やいのやいのと、煩かったんだろうな。」と素直に気付くことができました。

「今日いらしたあなたのご家族を、ご紹介下さい。」と先生に指示された父は、母と私と障がいのある孫しか、続柄と名前を正確に答えられませんでした。しんとした硬い雰囲気を感じて、私が、冗談ぽく「ほら。ちゃんと関わらんと遺産相続のときに損するげんよ。」と二人の弟に向けて言うと、先生は、「いやいや、お二人は『お父様にとっては、煩いと感じないキーマン』なのかもしれないですね。ですから、息子であることを活かして、物事を動かす場面がきた時に、ご活躍いただきましょう。これから沢山ありますよ。例えばですが、『石鹸で洗わない。風呂に入らなくて困る』とのことでしたが、外国生活が長いお父さんに、シャワー以外の入浴は当然困難。だからと直ぐにデイサービスではなくて、『息子さんがスーパー銭湯にお連れしては如何』でしょうか。是非、背中を流して差し上げて下さい。最初のちょっとした動作を手伝うだけで、その後の動作が不思議とできるものです。残念ですが、混浴ではないので、息子さんの特権です。それから、お父さんは外国生活が長く、英語が堪能でいらっしゃる。私の診察の時には病気の奥さんのプライドを守るために、これからは英語で会話しましょう。厳しく教えてくださいね。」とご提案戴きました。「ザツライト！」と父は、即答し、自ら手を差し出し、先生と握手を交わしていました。いつの間にか、妻ではなく自分の事に診察の話題が、すっかりすり変わっていることにも気付

かず、なかなかのご機嫌さんでした。先生ご提案の『英語での診察』は、母ではなく、主として「父のプライドを守るため」だったのです。

その後、残念ながら先生の転勤にて、お別れをするまで、ずっと「英語での診察と、弟たちとのスーパー銭湯通い」は続きました。その中で、先生より、ご提案いただいた「外国生活が長いことを上手く活かしたご提案」をご紹介します。

① 移動手段には、タクシーを使うように誘導する。「英語表記した名刺」に、複数の過去役職や自宅住所・電話も表記し、1000枚印刷しました。

父の日に、「素敵な名刺入れ」に添えて手渡す。タクシーに乗ったら、それを渡して、自宅まで送迎して戴き、支払いは、月末まとめて支払うようにしました。

会社勤めの頃と同じようにしたので、上手くいって、バスに乗り終点まで行って保護されることがなくなりました。

② 父は外国生活が長いので、同世代の高齢者よりは、カードを使い慣れています。財布から、お金のやり取りができにくくなってからは、お札ばかり手渡すので、財布に小銭が貯まりにたまり、とうとう小銭を「チップ」と言っては、銭形平次か鼠小僧のように、ばら撒くようになりました。銀行員をしている一番下の弟の提案で、父のプライドと財産を守るために、「成年後見制度」の利用を急いで勧め、「一月の利用限度額を定めて、父専用のデビットカードを作る」ことにしました。この時に、参

考にしたのが、石川県で共に家族面接を学ぶ会の事務局をしている友人である寺本紀子さんから戴いた「失敗する権利の保障」という言葉です。そうだ、父と母が作ってきた財産。生活が破綻しない範囲で、上手く失敗をする権利もあるはず。弟が「お母さん、一月に父が失敗しても許せる限度額を決めてもらいたい。」と言うと、母は、最初、「一万円」と、すごくケチなことを言うので、「せめて昔の小遣いぐらいは」と、弟と二人で文句を言うと、なんと三倍になりました。笑

③ 外国生活の長い父には、赴任地の決まり事で、常に女性のハウスキーパーさんの存在がありました。当時は、そういう仕組みで、発展途上国への社会貢献を行っていたのです。ですから、どうも女性とのつきあい場面の多くが、「主従関係」にあり、得意ではなかったようです。赴任地の特徴に気付かれた先生から、「デイサービスの見学の際には、お迎え担当のデイサービスの職員さんには、茶髪のお兄さんにカラーコンタクトを入れて戴いてはどうか。以前にそれで上手くいった方がいますよ。ケアの担当は、男性の方をお願いできたら、上手くいくかもしれませんね。」と、教えていただきました。実際の場面では、ケアマネジャーさんが「外国から研修に来ているので、お兄さんが困ったときの英語の通訳のボランティアに来て欲しい」と誘って下さいました。いよいよ見学の日は、「デイサービスのクリスマス会」を選び、私がトナカイ、父にはサンタクロースの格好してもらい、華々しくデイサービスデビューをしました。この日、サプライズで、バト

ンを渡された次の主治医の先生、ケアマネジャーさん、訪問看護師さんもいらして下さい、ケアマネジャーさんの計らいで記念写真を撮り、その後ずっと父のベットの枕元と私の家のリビングに飾らせて戴きました。デイサービスの方は、英語ゲームや脳トレーニング、父が収集していた懐かしい外国映画音楽の歌を使ったクイズなどにも取り組んで下さり、送迎、排泄、更衣、入浴のケアは、緩和ケア病棟への入院という転帰まで、ずっと男性スタッフで通して下さいました。本当に心から感謝致しております。

先生に、私は伺ったことがあります。「このようなお知恵は、どういう風に思いつかれたのでしょうか？」すると、先生はきっぱりと「それは、全て患者さん・ご家族、認知症の人と家族の会で、教えていただいたことです。」とおっしゃいました。先生は、認知症の人と家族の会の会員さんと一緒に、温泉旅行にも行っておられるとのことでした。数々のご提案は、正に、当事者自身の実体験と、当事者と伴に歩まれたからこそ蓄えられた、逞しい自慢の「知恵袋」だったのです。

これらのお知恵は、その都度、私の仕事でも沢山活かさせて戴いております。

今回は、2015年秋に、「父に末期癌が見つかった」ことで、新たに二人の素敵な先生につながり、在宅療養支援チームの輪が拡がり、どのような療養生活を送っていたのかについて、ご報告申し上げます。ここでは、「チーム自治医科大学 OB」が、大活躍下さいます。